

蕉門九州伝播考—支考と野坡と正教寺—

文学研究科日本文学文化専攻博士前期課程修了 眞杉 泰輝

序

現在、俳諧の大成者として広く知られている芭蕉は死してなお、諸俳人に影響を及ぼし俳聖として大切に崇められてきた。直弟子たちのうちのある者は在りし日の芭蕉の教えを俳書として記し、ある者は師に倣い各地を行脚し蕉風俳諧を伝播した。そして、芭蕉敬慕の俳人ネットワークは、全国に広がった。当然のことながら、近世に於いて遠隔地から義仲寺の芭蕉の墓所を参拝することは容易なことではなく、芭蕉を慕う者たちは各地に芭蕉の句を刻んだ石を置き、芭蕉塚とし大切な拠り所とした。

この近世に建立された芭蕉塚は現在九州地方にも多く見受けられる。福岡市東区にある枯野塚や熊本県八代市にある宗覚寺の稲妻塚などがその例である。このことは、芭蕉未踏の地である九州にも蕉門の俳人が杖を引き芭蕉の俳諧を伝播した痕跡ともいえる。

先に例示した枯野塚は、地元の俳人喃川が芭蕉辞世の句といわれ

ている「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」に感激し、博多に来遊した芭蕉の直弟子野坡に揮毫を依頼して元禄十三年（一七〇〇）箱崎の自身の庵に詣墓として建立した。つまり、芭蕉の死後、その作品や思想を直弟子たちが九州の文化圏に伝え、地元俳人たちと交わる中で着実に九州俳壇に影響を及ぼしたということが見受けられる。さらに、枯野塚の次に挙げた稲妻塚は文化四年（一八〇七）に肥後国八代の俳諧宗匠文暁（正教寺第十世住持）が、門人である弓削清壺が生前に芭蕉塚建立を切望していたことから、芭蕉句を刻み建立したものである。

この塚がある八代は、文暁が活躍する以前に芭蕉の直弟子支考が訪れ蕉風俳諧を説いたとされる地である。このことは、八代俳壇に蕉風俳諧が多少なりとも影響していることの証左といえよう。実際に、文暁の人生を俯瞰すると芭蕉の影響を強く受けている。

そして、文暁の家系には俳諧を嗜んでいた者が複数存在する。文暁の叔父支明や祖父と思われる乙明らである。旧来の研究では、こ

の乙明という人物についてははっきりとしたことは解明されていない。しかし、正教寺の寺伝とつき合せると支考来遊の時期に正教寺にいたのはこの乙明と推察される。したがって、本稿の中ではこの人物に関する情報を吟味しながら、支考との関わりや蕉風受容の歴史考察の足がかりとする。

九州への蕉風伝播の過程を見るために俳諧史を語る上で蕉門と並立される貞門・談林の俳諧がどのように日本全国に勢力を伸ばしていったかということを整理しながら、なぜ蕉門が九州に伝播し定着するのに他の地域と時差があったのかという疑問に対して、有力俳人の行脚の有無にあるのではないかと仮説を立て、先に挙げた他流の伝播定着の様子と比較検討していく。

また、九州には支考の流れをくむ俳人とともに野坡の流れをくむ俳人も多く存在した。したがって、本稿ではこの二人の直弟子に照準をあてながら芭蕉の没後に九州地方へその俳風が伝播していく様子を整理し考察していきたい。

一、蕉風以前の近世九州俳壇

九州に本格的に蕉風俳諧が伝播されるのは芭蕉の死後のことである。それまでの九州俳壇は去来の出身地であった長崎に田上尼・暮年・卯七などといった芭蕉と風交を持つ者がいた。したがって、ごく少数の蕉門俳人はいたものの大多数は古風俳諧の俳人であった。

これは、九州俳壇に芭蕉やその周辺人物との接触がなかったからである。それでは以下に、芭蕉生前の九州俳壇の様子とはいかなるものであったのかを整理していく。

一般に俳諧の歴史を紐解いていくときには、貞徳を中心とした貞門、宗因を中心とした談林、そして芭蕉を中心とした蕉門が各時期の俳壇の軸とする。各流派が短期間のうちに全国に伝播していったのは新しく発達した印刷技術によると言われることがある。

この技術革新によって俳書の刊行を比較的容易にし、少ない時間で全国を網羅する形で各々の俳諧を展開していくことに成功したとされている^(注1)。この流れは九州でも同じである。この印刷技術の発展が蕉門俳諧の全国への伝播の後押しをしたことは間違いない。

しかし、俳書の刊行だけではその土地に蕉門の思想を定着し支持層を獲得することは難しかった。言い換えると、俳書の刊行は流派の思想の伝播において必要条件ではあるが、十分条件ではないということである。もう一つの必要条件が揃ってはじめて十分条件となるのである。その条件とは有力俳人による行脚である。

まず、貞門俳諧と九州との接点である。貞門の重鎮が九州を行脚し教えを広めたところは大きいだろう。大内初夫氏によれば、松永貞徳が長崎に来遊していたと述べているが彼が地元の人々に俳諧指導を行ったかどうかは定かではない^(注2)。

九州への貞門俳諧の伝播の確実な接点は、重頼である。もちろん他にも九州に影響を与えた貞門俳人はいるが、今回は重頼に照準を

当てる。彼が編んだ俳諧選集の嚆矢といわれている『犬子集』（寛永十年刊）^{〔註3〕}には九州からの入選はない。しかし、この五年後に刊行された同じく重頼編『毛吹草』には肥前連衆の句が三句入集している。したがって、この頃には貞門俳諧の手が九州に伸びていたことがわかる。だが、作品に個人名が付されていないことを見ると貞門中枢との関わりは薄かったと推測されるもの、ここが九州俳壇と貞門との交差点といえるだろう。そして、寛文八年（一六六八）に重頼は豊前小倉、肥前佐賀、武雄、有田を経て長崎へ旅をした。その間、船で平戸や唐津にも遊んだという。そして、海路で肥後熊本に入り、北上し久留米を経て大宰府を訪れ、博多を通って小倉に立ち返り九州をあとにしたようである。この九州の旅を経て寛文十二年（一六七二）に刊行された重頼編『時勢粧』には筑前博多・豊前小倉・肥前佐賀・平戸・大村・長崎・肥後熊本・豊後臼杵から計八十七名の九州俳人が入集している。このことから、少なくとも『犬子集』では入集者がいなかった九州であったが『毛吹草』を経て『時勢粧』に至るまでの四十年強の間で貞門俳諧が九州に浸透していったことがうかがえる。

つぎに、俳壇史に登場するのは宗因を中心とした談林派である。宗因は肥後国熊本出身であり、熊本一乗院釈将寺の豪信について和歌を学び、十五歳頃から八代城代加藤右馬允正のもとで奉公を始め、連歌好きの主君の影響を受けてか連歌修行に打ち込んだ^{〔註4〕}。その後、京の里村昌琢のもとで数年間の連歌修行に励む。寛永六年

（二六二九）に帰国するも同九年（一六三一）に加藤五十二万石の領地が没収され、お家断絶の処置がとられた。主君の失脚に伴って一時帰国をすることはあるも主君と共に熊本を去った。

しかし、寛文三年（一六六三）に約三十年ぶりに小倉城主小笠原忠真の招きで九州に足を運んだ。それから、同四年（一六六四）には忠真の古稀の祝いのため再度九州を訪れ忠真と面会している。この辺りをきっかけに宗因と九州は再度つながりを持ち始める。

寛文末期には、貞門俳諧に新鮮さを見失っていた若い俳人を中心に宗因の新しい俳風が受け入れられ新派の指導者として担ぎ上げられる。また、同時期『宗因千句』（寛文十三年刊）や西鶴編『歌仙大坂俳諧師』（寛文十三年刊）が刊行され、その後の延宝年間を経て宗因の談林俳諧は全国に普及していく。寛文期の宗因の九州行脚の折に接点を持った九州俳人たちにとってこの談林の流行は驚きだったであろう。同時に、この時期貞門から談林に鞍替えした九州俳人も談林系の俳書に散見される。

いうまでもなく俳諧という文芸は、日本古来の和歌伝統の流れの上に生まれ出たものである。ここまで見てきた貞徳・宗因はいずれも連歌師である。そのような彼らが俳諧に対して非和歌的、非連歌的な世界観を見出しその座の空間に遊んだのである。ともすると、貞門と談林は全く別物として扱われる。たしかに、この二派の間では激しい論争が繰り広げられた歴史がある。しかし、根幹にある両者姿勢は同じである。別の言い方をすれば、貞徳と宗因の俳諧への

姿勢は同じで、貞徳が基礎工事をしたうえに宗因が滑稽で遊戯的な要素を注入していった。いわば、これが俳諧初期の九州伝播並びに定着の過程ともいえる。

そして、現在俳諧の大成者とされる芭蕉もこの両方の俳諧を経験した上で自身の俳諧を確立させていくのである。

貞享から元禄期に俳壇では芭蕉を中心とする蕉門が俳壇に勢力を拡大させていく。それは、『おくのほそ道』の旅に代表されるように蕉門の中心たる芭蕉自身が旅に生き、各地に直弟子・信奉者を獲得していったことに起因する。しかし、芭蕉未踏の地であったためか九州への蕉門伝播は遅い。芭蕉が杖を曳いた土地には芭蕉の俳諧が根付き、蕉門の俳壇での存在はゆるぎないものになっていく。ところが、同時期の九州俳壇は貞門・談林の古風俳諧が依然勢力として強く根付いていた。

このことから俳諧に関して、ある流派の伝播・普及とその流派の有力俳人の行脚との因果関係は非常に大きなものがあることがわかる。芭蕉の登場以降、俳諧史の主流を行く蕉門俳諧でさえ九州に関して伝播が遅れたのは、芭蕉を含め蕉門有力俳人の行脚があまり盛んに行われなかったからだ。

もちろん、芭蕉も九州に関して興味を示していなかったわけではない。古人と尊敬した西行や宗祇も九州の旅を経験しているし、元禄四年九月二十三日付中尾宛書簡には「九州・四国の方一見残し置申候間、何とぞ来秋中ニも江戸を出可申覚悟」とあることから九

州行脚の意思はあったようである。とはいえ、体調の悪化もあり芭蕉の九州上陸はかなわなかった。

このような経緯もあり、芭蕉の死後蕉門俳人が次々に九州行脚を行い、九州俳壇の急速な蕉門化が進んでいった。

二、支考の九州行脚

九州俳壇への蕉風俳諧伝播を考えるとときに支考の九州行脚は刮目すべき史実である。芭蕉の死後四年目の元禄十一年（二六九八）に支考は、六月一日に小倉に入り九月一日に同地をあとにするまで日田・熊本・八代・長崎・久留米・太宰府などを巡り地元俳人たちと俳交した。この旅をもとに『梟日記』『西華集』『続五論』などの著作物が生みだされた。支考自身もこの旅で得たものがあつた証拠だろう。

また、芭蕉未踏の地である九州に師である芭蕉の俳諧を伝えようという真剣な姿勢が窺える。それは、『続五論』の「此五輪は西華坊が一字一涙也」というひと言に込められている。

支考は蕉門でも特に理論派の男であつたと言われているが、彼の平明でわかりやすい俳論が地方俳人の芭蕉ならびに蕉風俳諧理解を促したのは想像に難くない。また、九州での彼の教えは机上の空論ではなく、実際にその土地に立ち寄り地元俳人と一座するといった指導法であつた。すなわち、対機説法という指導法を選択していた

ということである。したがって、九州にはじめて入ってきた流派の俳人であっても地元俳人がその俳諧哲学をスムーズに受け入れ親しんでいくことが出来たのである。

ところで、支考といえは岩田涼菟・麦林舎乙由の伊勢派と近似した俳風をもつ美濃派を立ち上げ勢力を伸ばしていった。小難しい都会系の俳風とは異なり平明な俳風であることから伊勢派とならんで田舎蕉門と揶揄されることもある。しかし、広く一般に芭蕉の俳諧も魅力を地方の非知識階層へ伝えたという点では伊勢・美濃の両派は大変な功労者といえる。

では、この両派はいつから俳諧史の上に出てくるのだろうか。この両派の登場に関して大内初夫氏は、『俳諧大辞典』と『三疋猿』を根拠として元禄十七年（一七〇四）としている^(注5)。すなわち、支考が九州行脚を行ったときにはまだ伊勢派だの美濃派だのといった田舎蕉門と言われる派閥は出来ていなかった。したがって、九州行脚中の支考には自身の派閥を形成していきこうという思考はなかった。

つぎに、元禄十一年（一六九八）の支考の九州行脚についてどのような地元俳人と交流を持ったのか具体的に見ていきたい。支考がどのような順路でどこに行ったのかは別添の参考資料をご覧頂きたい。

それにまとめた情報をもとに考えると九州に蕉風俳諧を伝播するポイントともいべき人物との交流が見受けられる。

はじめに、六月十一日の豊後日田での朱拙との一座である。朱拙はそもそも中村西国に談林俳諧を学び、豊後日田に住みながら九州各地を行脚し俳諧を広めていた人物とされている。ところが、元禄八年（一六九五）に九州に杖を曳いた広瀬惟然と面会し、蕉門に転じている。いずれにしても、当時の俳壇のリーダー格で俳壇の形成に力があつたことは間違いない。九州に自流の俳諧を伝播するにあたって会うべき人物のひとりである。

朱拙は、自らの選集の刊行ばかりでなく、他の俳人の選集にも序文を書いて与えたりして刊行に援助を惜むことがなかった。この九州俳壇の牽引者であり、九州蕉門の先駆けである朱拙とはいったいどのような人物であったのか。

大内初夫氏翻刻の『豊西俳諧古哲伝草稿』^(注6)に

漢才を原とし、俳諧を好、又詩文を工めり、或時、漢学をもて侍官の望ありて豊の小倉に至りしかども、猶漢学は遂ざりしや、欲るまゝにならずして空還、其後はいよく俳道を務む。此子や、初は奥の三千風がごとく、師伝なくして句を吐事年あり。

とある。すなわち、朱拙は漢学の才をもって仕官したいという考えを持っていたが、夢かなうことはなかった。したがって、その後は俳諧の道に勤しんだようである。「詩文を工めり」とあることから詩歌として言葉を紡いでいくセンスも持ち合わせていたようである。

しかし、最初の頃は、師匠について俳諧を学ぶということはなかったようだ。その朱拙に俳諧を教えたのは九州談林派の雄、中村西国であるとする先学の意見もあるがその理由は西国の追善集^(注7)に

転びけり人涼ませし根本なるに

散人朱拙

そして、西国の二十五回忌の折には

志手の窪にもる清水かな

朱拙

という句を寄せているからだとしている。これだけの理由で朱拙が西国の弟子であるといいきってしまうことは難しい。したがって、先に挙げた『豊西俳諧古哲伝草稿』の「師伝なくして句を吐事年あり。」とあることから西国とは師弟関係があったということではなく、同じ日田の地で俳諧を通じて交流があったと考えるべきである。つまり、彼らは俳友と表現する方がいいだろう。そう考えると、友人の追善ごとに句を寄せるのは不自然なことではない。また、西国とは友好的関係を築いたようであるが、談林俳諧自体に心酔していたとは考えにくい。それは、朱拙には次のような痛烈な西鶴批判の言葉があるからだ。

難波の西鶴といふもの、一日二万句のぬしになりとて、ひと

ゆるさる二万翁とほこりたるは、もとより風雅の瞽者なれば力なし。

これは、朱拙『けふの昔』に書かれた言葉として大内初夫氏が『九州俳壇史の研究』に紹介されているものである。内容としては有名な西鶴の矢数俳諧を痛烈に批判したものである。また、別のところでは「渠は此筋の野人にして論ずるにたらず」とも述べている。いずれにしても、西鶴の弟子である西国とは友好関係があったとしても、西鶴には批判的である。したがって、この頃の朱拙は何かしらの派閥に所属して句作するというのではなく、俳諧自体を楽しんでいることがわかる。貞門や談林に彼を酔わせる魅力がなかったのか彼が「我が道を行く」と周りの俳諧流派を否定的に見ていたのかはわからないが集団に属してその教えのもとに俳諧をなすことはなかった。

しかし、元禄八年（一六九五）に九州を行脚した芭蕉の直弟子広瀬惟然と出会うことで朱拙は蕉門俳諧に傾倒していく。

それまで師を持たなかった朱拙であるが、惟然との面会後は芭蕉の教えに賛同し九州各地に杖を曳きその教えを伝播した。九州俳人の中核としての実力を磨き上げながら、俳諧を誠実に求道していく誠実さや後進への心配りから、朱拙のまわりには慕ってくる者が絶えなかったという。

元禄十一年（一六九八）六月十一日の豊後日田でこのキーパーソ

ンに出会い俳諧に興じた。支考はその人生で九州行脚を一回しか行っていないが地元の有才俳人と顔を突き合わせて俳諧に遊び語ることで確実に芭蕉の教えをその土地その土地に置いて行ったのである。つぎに、六月十四日野紅亭での一座である。英彦山の野紅といえ、その妻りん女とともに俳諧に遊んでおり、双白堂と称して俳書をしたためるなどの俳諧活動を行った人物である。

この野紅夫妻に関しては支考より後にこの地を訪れる野坡との交流の方が密であるが、そもそも古風俳諧に遊んでいたところを芭蕉の直弟子の来遊によって蕉風に転じたという点や、以降、同じく蕉風伝播の立役者である野坡との友好関係を見ると支考が野紅亭で一座した事実は後の蕉門の行脚者に良い影響を与えたといえるだろう。管見の範囲ではあるが、この夫婦の行脚についての記録はない。したがって、創作と俳文執筆が彼らの俳諧活動であった。これをバックアップしたのは野坡であり、刺激を与えたのは支考など蕉門俳人との俳交経験によるものであろう。

さて、支考の九州行脚の行程は宇佐神宮、長崎、太宰府の当時の行脚の定石をなぞるものであることがわかる。彼の行脚の目的地は現代の大分、福岡、長崎の各県である。したがって、行程にある熊本各地というのはあくまで通過地点に過ぎない。要は、佐敷から海路で長崎に向かうまでの道のりに熊本があった。このように書く

と熊本が必要ないかのように聞こえるかもしれないがそうではない。

宰府や宇佐神宮のような名所名刹がなくとも有力俳人が停泊し、中央からの知識を落としていってくれる位置にある。また、熊本に限らず地方には中央に勝るとも劣らない文化的需要がある。別の言い方をすれば、中央から来た高度な文化を受け取り伝えていくだけの器があるということである。この器と地理要因がうまくかみ合う土地が熊本なのである。したがって、支考行脚の際には地元俳人理曲が一座し歌仙を巻いているが、支考の評判は地元俳人に伝わっており熊本の正教寺の僧であった乙明は元禄十四年（一七〇一）に上洛の折に柳後園で支考と師弟の関係を結んだ。乙明には支考の教えが身体に合ったのであろう。そのあとに出る支考編『三日歌仙』（宝永三年刊）には乙明とともに肥後の俳人が使帆・百我・軽芦と計四名入集している。

支考が行脚したことによって蕉門と九州俳壇との接点はできた。このことは疑う余地もなく支考の功績である。しかし、どうもその影響の浸透の速さは遅い。『三日歌仙』にも熊本俳人四名が入集したとはいえ、まだまだ数は少ない。九州の俳人という視野に拡げても計二十四名しかおらず支考の影響を受けた俳人というよりは博多の未雷など野坡系の俳人が多い。支考は蕉門俳諧を九州に伝播したが、当時の勢力としては大きいものではなかった。むしろ、勢力的に多かったのは野坡と接見した俳人であった。

野坡であろうが支考であろうが蕉門の俳人であることに間違いはない。また、両者が九州を取り合っていたわけでもないので大きく

こだわって論じず、蕉門が伝播していったとおおらかにとらえるべきである。しかし、九州俳壇に蕉門が伝播したという事実に対して、野坡がどういふ働きをしたのかとうことは整理する必要がある。

二、野坡の九州行脚

野坡『袖日記』（元禄十五年）には次のようにある。

元禄戊寅、咲初る菊の花に門出し侍りしより、鞍つぽに腰をかゝめ、鬢髪は汐風に吹きちゞめられ、長崎の巷にわらぢをぬぎし比は、雲さだまらぬ空と成、雨の往来もいそがしく、野山みなうつろい侍る。

元禄戊寅は元禄十一年である。したがって、野坡は元禄十一年の秋ごろに長崎に向かったということになる。このときの旅は俳諧を目的としたものではなく、三井越後屋の商用での旅であった。このとき越後屋の手代を務めていた野坡は、この後元禄十四年まで長崎に滞在する。この頃の長崎は鎖国政策中、唯一海外との接点を持つことができた場所であることは言うまでもない。当時、外国との取引の際に使用する銀が不足していた。したがって、この銀不足対策のために江戸から長崎に派遣されたものと推測されている。しかし、問題解決のキーパーソンであった長崎奉行諏訪頼隆が野坡の長崎到

着の前後で奉行職を代わってしまった。つまり、野坡としては当てが外れていたずらに日々を過ごしていた。

このような日々を送っていた野坡を誘って地元俳人と引き合わせたのが去来である。野坡の長崎来訪の前に帰郷していた彼は地元俳人の陀方・宇鹿・曾米といった地元俳人に自分と同じ芭蕉の門人である野坡であると紹介し双方の交流を促したようである。確かに、去来はその著書『旅寝論』の序文で「軽き事野坡に及ばず」と記しているほど野坡のことを評価している。そして、元禄十二年九月に去来が同地を去ってからは野坡が長崎俳壇の中心となった。その証左として以下に元禄十二年冬から同十三年春までの野坡の俳諧に関する軌跡を見たい。ただし、これは大内初夫氏が行った調査結果を参看したものである。

元禄十二年冬「商人の」歌仙（『道の草』所収）・「笹のはの」歌仙（『蝶姿』所収）・同十三年春「姉いもと」歌仙（『裸麦』所収）といった地元俳人たちの連句作品、また、十二年冬には卯七と一緒に一の瀬街道の傍らに時雨塚という芭蕉塚を建立している。そのほかには、宇鹿・紗柳の後見人となって『草の道』（元禄十三年刊）・『裸麦』（元禄十四年刊）をそれぞれ編集、刊行している。さらに、長崎以外の九州俳人にも野坡の評判は波及したようで、紫白編『菊の道』（元禄十三年刊）には発句十七句、助燃編『蝶姿』（元禄十四年刊）には歌仙一卷、晚柳編『放鳥集』（元禄十四年刊）には発句六句と俳文「仮媒の賦」が収められている。

このようにして最初の野坡の九州行脚・長崎滞在は、長崎俳壇をいっそう盛況に導いた。そしてその評判は九州のほかの土地の俳人の耳にも入り、野坡との俳交を求めてきた。それに対して野坡が誠実に対応したというのが見て取ることができるといえる。これは、この長崎滞在が長期にわたったことが良かったのだろう。また、ここでの経験はこの後の野坡の九州行脚の下地になる人脈を形成し、この九州という土地に自身が入り込み開拓の余地があることを確信させたに違いない。

元禄十四年秋江戸に帰着後すぐに三井越後屋の職を辞し、翌年再度九州へ足を延ばすことになる。そして、幾度もの旅の中で九州蕉門の形成と鍊成を行なった野坡の九州俳壇醸成への功績は多大なものがある。以下に、元禄十五年以降の野坡の九州行脚の様子を略年譜の形でまとめていく。

・元禄十五年（一七〇二）

久留米—肥前田代—蘭部—久留米—日田—久留米—博多—箱崎
—黒崎の順に曳杖

久留米では俳人佐越亭逗留

日田（英彦山とも）では双白堂（野紅・りん女夫妻）逗留

（註 佐越はりん女の実兄）

博多では未雷亭に逗留。

箱崎十里庵に逗留。

・宝永三年（一七〇六）

日田野紅・りん女夫妻亭に逗留

肥後の国にはじめて入りし比、乙明亭興行

紛れ込粟の一葉や国の風 野坡（『田植諷』）

・宝永五年（一七〇八）

宝永五年卯の春九刃行脚の首途

春の日にはれて旅立草の原

すると蝶追除けて若葉哉

卯の花にせめて運ぶやはへの風

・正徳二年（一七一二）

『市山句帳』に「九月十一日 吉井にて」の前書きがあり

「分けて行菊のたはミや竹の肌 市山」を立句とした利曾・

紗方・紗利・猿芝による歌仙があるという。

また、十月四日にも猿芝亭での歌仙が残るといふ。（大内初

夫氏による。）

・正徳三年（一七一三）

野坡『柿木記』（正徳三年）には「筑前国春よしといふ処にて」とあることからこの年にも九州にいたものと考えられる。

『市山句帳』に

吉井より菌部へ通り給ふをまちて、先生をまちて

春雨の跡に二日ハ音もなし

市山

市山の前壁にやすみて

立どまる花や柳のつきあたり

紗方

とあることから、この年の春頃まで九州にいたことが分かる。

・享保元年（一七一六）秋に九州入り

黒崎―日田―杷木―吉井

・享保二年（一七一七）

吉井―筑後星野金山―長崎

・享保三年（一七一八）（十月―翌年冬まで）

芭蕉二十五回忌を熊本で催す。筑前内野。肥前菌部。久留米。

長崎と逗留。長崎には三月から九月まで逗留。

・享保五年（一七二〇）十月―翌年八月まで

筑後（十月）―長崎（新年）―筑後（五月）―熊本（六月）

八月）

・享保七年（一七二二）（五月）―冬まで

博多―生の松原―熊本（九月）―杷木

・享保十一年（一七二六）冬―同十三年五月

八幡―福岡―飯塚

*筑前・筑後・肥後・豊前の門下・俳友が逗留先に訪れている。

この旅の行程をもとに、今回は元禄十五年（一七〇二）、宝永三年（一七〇六）の旅に関して詳述したい。はじめに、元禄十五年の旅についてである。この春に辞職後すぐに江戸を立ち、俳諧目的の行脚として初めて交流を持った有名俳人は野紅・りん女夫妻ということになる。この出会いを取り持ったのは久留米の俳人佐越である。

この人物は地元では有力な宗匠であった。そして、りん女の実弟でもある。この紹介もあつてか順路としては長崎方面に向かつていたにもかかわらず一度久留米に戻り、長崎とは真逆にある日田の山奥へと向かつている。このことに関して野紅『小柑子』（元禄十六年刊）には、野坡が雨風の大変な中苦勞して日田の山奥に住む夫妻宅まで訪れたことや「必と約せし事なんありけらし」とある。では、悪路を必死に歩いてまで会う約束が野紅・りん女夫妻との間にあつたのか。あつたとすればこれ以前に何らかの俳交があつたのであるうか。

いなづまやいたり来たりて夜を明かす りん女

このりん女の句は、朱拙編『けふの昔』（元禄十二年刊）初出の句である。これに対して野坡は自身が後見人となつた晩柳編『放鳥集』のなかで「此句は豊後の野紅子が妻の吟なるよし。秀逸まゝきこえ侍る中にもたゞあとなくいひながし、見るにまバゆく、おもうふにふかし。その工ミなるあとを覚えず。」と激賞している。

このりん女の句が野坡と野紅・りん女夫妻をつないだといつても過言ではないだろう。先の長崎滞在中に両者の間には面識はなくとも繋がりはできていた。翌年のこの行脚の際に野坡は意図的に佐越に勧められてかは分らないが、自身が激賞した句の作者を訪ねたのである。さらに、この亭主である野紅は代々里村の庄屋をつ

とめた家の当主であり、生活に余裕もあつたからか野坡以外にも、路通・惟然・支考・舎羅・怒風などといった多くの俳人を行脚の際に厚遇した。野坡もこの旅の折には霜月の二十七日から翌年二月上旬まで長く日田の地に留まつた。そのときに、朱拙・釣壺・里仙・芝角・紫道といった九州俳人たちの歌仙や俳書にたびたび登場する俳人たちとも交流を持った。この野坡の来訪を記念した俳諧興行をまとめたものが野紅『小柑子』である。

この後、再度久留米に戻り佐越と彼の呼びかけで集まつた地元俳人とともに風雅に遊んだ。そしてここでも佐越に力を貸して佐越による俳諧選集『杉丸太』（宝永二年自跋）を編んだ。後年この久留米を含む筑後地方は野坡流が盛行することになる。この基盤はこの行脚での俳交とこの土地の宗匠の俳諧選集編集への助力の賜物といえるだろう。そして、このあと野坡は博多方面に抜け未雷亭などに旅寝して、最後は箱崎の哺川の十里庵に逗留している。ここでも野坡は庵主である哺川の頼みで『枯のつか』（宝永二年刊）成立にも手を貸した上に、十里庵の傍らにある芭蕉塚枯野塚の揮毫も行っている。

このように博多、箱崎でも地元俳人の中に入り込み自身の力を惜しみなく分け与えている。

以上、野坡の俳諧目的の最初の九州行脚の様子である。ここで見てきたように野坡の九州行脚は地元俳人の中に入り込み俳諧をもつて人々をひきつけ、その人々を大切の助け育てるといったものであ

る。

次に野坡二回目の九州行脚になる宝永三年（一七〇六）について詳細を見ていきたい。この旅の折にも野紅・りん女夫妻宅を訪れている。その後、野坡は熊本方面に抜けたと思われる。

肥後の国にはじめて入りし比、乙明亭興行

紛れ込粟の一葉や国の風 野坡（『田植諷』）

この旅の中で、野坡は九州北部だけでなく九州の中央部である熊本方面にも杖を曳いている。その熊本で興行が行われたのが右にもあるように乙明亭である。これは大内氏によれば正教寺七代住持であるという。肥後の正教寺といえは『俳諧芭蕉談』『花屋日記』の著者として知られる文暁が住持を務めた寺である。しかし、文暁が活躍した時代は明和から文化年間であるため、乙明は文暁よりも前の住持ということになる。そこで、正教寺の寺史をもとに逆算をすると、元禄十六年（一七〇三）から享保三年（一七一八）の間住持を務めた正教寺第六世円舎がこの乙明にあたるものと考えられる。おそらく、大内氏が乙明を第七世としたのは第四世と第五世の間に寺務を執った桂芳を住持と考えたためであろう。このことは後程詳述する。ちなみに、乙明は支考の門人とされている。^{（注8）}

この肥後來訪時のことは、地元俳人白川編『漆嶋』にまとめられている。歌仙が二巻残っており、それぞれ、野長・三雅・百我・江

橋・一貞・飯足・桃垂・軽舟・呂志・白川と使帆・白川・乙明・軽芦・流水・可翠・江柳・忍水・芳水・楽水である。白川は現熊本市中央区白川あたりに住んでいた商人、三雅も同新町の商人。また、使帆は蕉門の俳諧選集などにも名前が散見され、前記の白川編『漆嶋』の跋文も担当していることから地元でも熱心な俳人だったことがわかる。元禄期の二回の九州来訪の結果、この時までには野坡の名前と評判は肥後国にまで及んでいたのだろう。

いずれにせよ、この行脚で野坡の九州俳壇への影響はまた濃くなった。同時に九州への蕉門の影響も大きくなったといえる。

この後、野坡は享保期に毎年のように九州に杖を曳く時期があり享保十一年（一七二六）の最後の九州行脚の折には六十四歳と高齢であったためか八幡、福岡、飯塚の各逗留先に九州中の門人、俳友が集まって野坡を囲んだ。多くの俳人が高齢の野坡を慮り、自ら接見に行った。それは、野坡が長い間九州を行脚し地元俳人と一緒に俳諧に遊び、俳書の刊行などの後押しを積極的に行った功績といえる。

三、中央俳人と寺院の関係

正教寺は熊本県八代市にある浄土真宗仏光寺派の寺院である。その始まりは元亀元年（一五七〇）といわれている。^{（注9）}

俳文学研究でこの寺の名前が挙がるときは十中八九、創作芭蕉伝

記『花屋日記』を記した文暁に関するときであろう。しかし、今回はこの文暁の祖父と目される乙明と当時の九州俳壇に関して述べる。

宝永三年（一七〇六）に野坡が初めて肥後に来訪した際の句は先んじて紹介した。その前書きに「乙明亭興行」とある。大内初夫氏の乙明に関する解説を見ると正教寺第七世住持で元禄十四年（一七〇一）に京都に支考を訪ね弟子入りしたという。また、九州俳人の俳書にも歌仙にもあまり名前は見られない。しかし、支考に弟子入りをしたということは熱心な俳人であったことには相違ない。

ところが、正教寺の寺史を参看するとこの乙明という人物が正教寺第七世住持ではないことがわかる。はじめにその部分から説明をしたい。

四世空含は寛文十一年（一六七二）一月に没している。そのときに、第五世となるべき空圓はまだ幼少であったため多羅木鶴城から桂芳を迎え寺務を執らせた。正教寺としては彼を第五世に据えようとするが桂芳はそれを断り寺務だけをこなしたようである。四世空含の嫡子空圓を五世に据えた。そのあと元禄十六年（一七〇三）に空圓が亡くなり、その嫡子圓含に住持の職が渡された。この圓含が以降、享保三年（一七一八）三月まで住持を務める。すなわち、先に挙げた蕉門の支考や野坡が来訪した時の住持は正教寺第六世の圓含であると考えらるべきである。この圓含には少なくとも三人の息子がいる。第七世菊天、第八世梅雪、第九世文明である。菊天は第七世を継いですぐ若くして亡くなっているため情報がない。

そして、梅雪は青蓮院にも認められるほどの和歌の才能を持っていた。また、梅雪は僧としてもすぐれており、享保十九年（一七三四）に弟に第九世を継がせ自身は仏光寺本山の要職に就く。第九世を継いだ文明は俳諧と漢詩を嗜んでおり、熊本時習館や八代伝習堂の教授陣との交流を持つなど、地域ではそれなりの知識人であったことがうかがえる。また甥にあたる文暁が京都から正教寺を継ぐべく帰熊した際には俳諧の手ほどきをした形跡が残っている。その第十世文暁は、『俳諧芭蕉談』『花屋日記』といった創作芭蕉伝記を著わし、八代の俳諧宗匠として活躍した人物である。

このように、支考や野坡と接点を持った八代の一僧である乙明の正教寺には俳諧を嗜む文化が定着し、以降長く八代の俳諧の中心になってきた。ここでは現在でも連句の会が開かれているという。このように連綿と地域の文化圏の拠点としてこの寺が残っている。では、近世九州俳壇においてこの寺がどのような役割を果たしており、中央からやって来る俳人から何を得たのか。

まず、中央から行脚してきた俳人にとって門人や親せきなど便りのない土地において、宿泊や食事のあてになったのは寺しかなかったのだろう。寺には、人々を救うという大義名分と一般人よりは教養を備えた僧がいる。俳人宅への行脚であれば、玄関先で句を披露し、それが佳句であれば宿泊を認めるという習わしがあった。しかし、今回述べている行脚は実力派俳人を相手にすることは前提がない。したがって、行脚をする側の視点に立てば宿を得るとい

第一の目的だが、そこに俳諧を受け入れられるだけの文化圏が存在すれば俳諧伝授も可能になる。そうしたことからある程度学識を持った僧がいる寺というのが、行脚俳人の宿泊先として目をつけられたのである。反対に地元からすれば、有名俳人を宿泊させた。もしくはその俳人と一座したという事実が俳諧精進の動機付けとなり、その場所は周囲から聖地のように捉えられ文化圏の中心になっていったものと考えられる。

文化圏が形成されれば自然と蕉門俳諧の祖たる芭蕉の言説は伝播され、そこに尊敬の念を感じた者たちが芭蕉塚を建立し地元俳人たちの大切な拠りどころとなっていく。

地方の俳人たちにとって中央の俳人が行脚してくるとするのは俳諧人生にとって大きな事件である。それを機に弟子入りをしたり、俳書刊行の手助けをしてもらったりした。そうして中央とのつながりを持ちつつ自分たちの足元の文化圏にもその教えを継承していった。そして、文化圏の中心となった寺は中央と地方の重要な接点となり、遠方からの客人へ宿・食事を提供するかわりに僻地では手に入らない見聞を得ていたのである。

結

本稿では、大内初夫氏が『近世九州俳壇史の研究』でまとめられた九州俳壇史の調査をもとに、芭蕉の直弟子のうち支考と野坡の二

名に照準を当てその行脚の様子をまとめた。その上で、正教寺の果たした俳文学史上の役割について考察を加えた。

その結果、九州という芭蕉未踏の地に蕉風俳諧が伝播し根付いていった。その要因は有力俳人の行脚にあるということ述べた。この行脚が行われたのは芭蕉の死後であった。生前から蕉風俳諧は全国的広がりを見せてはいたが、九州に関しては依然として貞門・談林俳諧が根づいていた。しかし、芭蕉没後の直弟子による度重なる行脚によって元禄後期ごろには蕉風俳諧が徐々に九州俳壇に伝播されたといつてよい。

また、行脚の際に地元俳人は宿や食事を用意し中央から来た俳人は自身の知見を与えた。この相互補完関係のおかげで九州にも蕉門俳諧が広がり、後世に連綿と伝えられその土地で醸成されていく。そして、九州俳人からも俳書や選集が生まれ、地元には芭蕉追善の塚が建立される。

ところで、芭蕉の思想が伝播されるにあたって重要であったのは間違いなく行脚である。それを確認するために今回は蕉門以外の俳人がその思想をどのように伝播したのかも確認した。具体的には、重頼や宗因の九州での動向の確認である。そして、先に挙げた蕉門の二人の行脚の様子を確認した。共通項は、行脚によって地元俳人と交流を持ったということだ。これが俳諧伝播を助長した。

つまり、伝播の手法として対機説法のように「その時・その土地・その人(達)」にあった話し方や指導法で自身の考えを示すことに

よって地方俳人にも比較的容易にその思想を伝播できたのである。

その伝播場として活用されたのは寺院であった。寺院を中心とした地元文化圏が構築され、そこは地方と中央の情報交換の場にもなった。とくに、八代正教寺の場合は九州の正中線上に位置し、すぐ近くには海もあり、陸路と海路の転換地点として都合のいい立地にある。したがって、九州に俳諧が伝播されるにあたって、乙明亭は長崎への海路を考慮したときに俳人たちの良い休憩場所となった。その対価として八代には俳諧文化圏が醸成されたといえよう。

当時、九州行脚の目的地として定石であった宇佐神宮、太宰府、長崎のデルタ地帯を巡遊する際に俳人が立ち寄る場として、俳諧を理解する僧がいる寺院の存在は大きかったといえる。

注

- 1 大内初夫『近世九州俳壇史の研究』「貞門時代の九州俳壇の章」に言及がある。
- 2 前掲書「貞門時代の九州俳壇」の章に言及がある。
- 3 『犬子集』などの古典籍の確認は早稲田大学古典籍総合目録データベース (<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/about.html>) を利用した。
- 4 前掲書「談林時代の九州俳壇」の章に言及がある。
- 5 『鹿児島大学文科報告』第二号・三号による。
- 6 前掲書「蕉風の伝播と九州俳壇」の章に言及がある。鹿児島大

学蔵、大内初夫氏翻刻。

- 7 豊後日田連中編『西国追善集』半一、写、元禄八年か、広瀬文库蔵。

- 8 前掲書「九州俳壇と美濃派俳諧」の章に言及がある。

- 9 正教寺現住持藁井信恒氏が書かれた正教寺の歴史を記した文章を参看した。二〇一四年にご本人から頂戴したものである。

- 10 別添資料作成に際して、堀切実『支考年譜考証』笠間書院一九六八年を参看した。そこには熊本に入ったのは「六月十四日」と記載されているが、誤植と判断し、二十四日とした。また、表合一とあり。

参考文献

- 石川八朗『九州の俳蹟』俳文学会九州有志 一九七〇年
大内初夫『近世九州俳壇史の研究』九州大学出版会 一九八三年
谷地快一・佐藤勝明ほか編『連句の世界』新典社 一九九七年

別添資料 (註 10)

支考元禄十一年 九州行脚日程			
日付	陽曆	場所	備考
5月30日	7月7日	下関	
6月1日	7月8日	小倉	有嘴亭着
6月4日	7月11日	築城郡築上町	浜の宮半歌仙奉納
6月5日	7月12日	中津	竿水・雲鈴ら表合一
6月11日	7月18日	豊後日田	朱拙らと表合一
6月14日	7月21日	英彦山	野紅亭、表合一あり。
6月18日	7月25日	玖珠	投錐・雲鈴ら、表合一
6月22日	7月29日	小国	
6月24日	7月31日	熊本	
6月27日	8月3日	八代	理曲ら、表合一
7月2日	8月7日	佐敷	ここから海路で長崎へ
7月9日	8月14日	長崎	卯七の十里亭に談合。表合一
7月11日	8月16日	同	去来と面会
7月18日	8月23日	柳川	
7月20日	8月25日	久留米	
7月22日	8月27日	太宰府	
7月24日	8月29日	博多	
7月27日	9月1日	福岡	発熱
8月4日	9月7日	黒崎	
8月11日	9月14日	小倉	
8月25日	9月28日	黒崎	
9月1日	10月4日	小倉	

A Discussion About the Pilgrimage in Kyushu Conducted by the Apprentices of Basho —Shiko and Yaba, Syokyoji—

MASUGI, Hiroki

Basho did not go to Kyushu in his life, so it was after his death when his thought became prevailing in Kyushu district by a lot of effort of his apprentices. In this paper, I focused on two of these people and arranged how his thought spread to Kyushu, and also mentioned what kind of roles Syokyoji in Yatsushiro Higo played in this process. Specifically, the state of the Kyushu-haidan before Genroku was organized in the order of Teimon and Danrin, and then summarized the process of the pilgrimage of the above two disciples.

On that basis, I examined the role of Syokyoji of Yatsushiro Higo in the Kyushu pilgrimage.